人口流出防ぎ農村守る役割

定着へ補助必須

冬期集住を研究する東北工業大学の沼野夏生名誉教授に、冬期集住の意義と課題を聞いた。

◇

過疎化が進む中、高齢者が住み慣れた地域で暮らせる冬期集住はより重要になる。しかし、多くの利用者は、共同生活に我慢を強いられているのが実態だ。居住施設だけを提供して「病院が近いからいいでしょ」では、ただの収容所になってしまう。そこに集まって冬になると「楽しい暮らしが待っているよ」としなければならない。

居住施設は増えているが、財源は平成の大合併で生まれた期限付きの補助金をあてにする施設が多い。国の手厚い補助がなければ冬期集住の存続は厳しい。

冬期集住は、豪雪地帯の人口流出を防ぎ農村の崩壊を防ぐ一つの手法といえる。元気な高齢者が冬の間過ごしてまた戻れることで多くの農地が守られているはずだ。冬期集住を定着させるために国は力を入れてほしい。

居住施設もすぐに閉鎖せず、継続できる工夫が必要だ。ある居住施設では、入居者が農産物で加工品を作り、収益を運営費に充てた例もある。

地方自治体も合併で補助が出たからやりましたでは済まされない。高齢者が生きがいを感じて安心して暮らせる環境をつくるにはどうするべきか、真剣に考えるべきだ。

専門家こう見る

東北工業大学名誉教授 沼野夏生氏